

# 黒人フェミニズム思想からのフェミニスト・スタンドポイント理論の批判検討 ——パトリシア・ヒル・コリンズによる黒人フェミニスト認識論とインターセクショナリティ

細島 汐華

## I. はじめに

近年、「インターセクショナリティ」への注目は日本でも高まっている<sup>1</sup>。インターセクショナリティは、1989年にアメリカの黒人女性法学者キンバリー・クレンショウによって術語が使用されたのち飛躍的な認知の拡大を見せ、フェミニズム研究の知的貢献として広く認められるようになった。

クレンショウの「人種と性の交差点を脱周縁化する」<sup>2</sup>は、具体的な雇用差別の裁判例の検証から、性差別・人種差別の是正における単一軸の枠組みにおいては黒人女性の経験が排除されており、差別解消への効果は限定的、もしくは全く機能しない——事故が起きても救急車がやっこない「交差点」が存在する<sup>3</sup>——ことを明らかにしたうえで、インターセクショナリティを中心とした新たな分析枠組みからの反差別政策構築の必要性を説いた。また、『黒人フェミニスト思想』<sup>4</sup>や、スルマ・ビルゲとともに『インターセクショナリティ』<sup>5</sup>を著したパトリシア・ヒル・コリンズも、黒人フェミニスト理論家として知られている。コリンズは、人種差別と性差別の間で取り残された黒人女性の経験を「絡みあう抑圧 interlocking oppression」などの言葉で表現しながら、人種、ジェンダー、階級などによる交錯の相互作用のなかで引き起こされる不正義を指摘し、抑圧分析にインターセクショナリティの視点を取り入れ、黒人フェミニズム思想の確立を目指した。

インターセクショナリティは、フェミニズム研究だけではなくさまざまな学術分野に拡大した一方、定義をめぐる混乱が指摘されている<sup>6</sup>。インターセクショナリティがフェミニズム理論に不可欠であるとの同意がある一方で、それが理論なのか、概念なのか、発見的装置なのか。また、個人の経験やアイデンティティの理論化に限定されるべきなのか、それとも社会構造に当てはめるのか、などである<sup>7</sup>。ビルゲとコリンズによれば、インターセクショナリティは、人びとを規定する様々な社会的カテゴリー——ジェンダー、人種、民族、階級、国籍、セク

シュアリティや障がいなど——が、それぞれ単一ではなく相互的に作用しながら複雑な不平等や差別・抑圧構造を形成している事象を明らかにする調査実践として一般的には認識されているという<sup>8</sup>。

2010年代以降は理論としてのインターセクショナルリティ研究が登場し、コリンズやアンジェ＝マリー・ハンコックの研究<sup>9</sup>は代表的なものである。これらの研究からは、インターセクショナルリティの学問背景にはさまざまな運動や抵抗知があり、なかでも、1970年代から80年代にかけ形成されたフェミニスト・スタンドポイント理論（以下、スタンドポイント理論）は特に近い関係にあることがわかる。特に「黒人女性のスタンドポイント」を打ち出したコリンズは、スタンドポイント理論家としても知られている。

しかしながらこれまで、スタンドポイント理論とインターセクショナルリティの関係が十分に検討されているとは言い難く、特に認識論をめぐる両者のつながりや違いについての議論は部分的なものとしてとどまっている。したがって、本稿は、初期のスタンドポイント理論及びその成り立ちと、そこから発展したコリンズの議論に着目し、それらとインターセクショナルリティにどのような認識論的關係性があるのかを明らかにする。そうすることで、インターセクショナルリティの定義をめぐる混乱に示唆が与えられるためである。

まず、スタンドポイント理論が登場した歴史的背景と、初期スタンドポイント理論の代表的な一つであるナンシー・ハートソックの議論を確認する。次に、コリンズによる「黒人女性のスタンドポイント」と黒人フェミニスト思想の特徴を振り返り、どのようにインターセクショナルリティの視座に向かっていったかをみていく。最後に、ハートソックとコリンズの議論の整理を通じて、認識論としてのインターセクショナルリティを考察する。

## Ⅱ. 認識論としてのフェミニスト・スタンドポイント理論

フェミニスト・スタンドポイント理論は、1970年代から80年代にかけてマルクス主義とフェミニズムが会うなかで生み出され発展した方法論、また認識論とされている。構造的な不平等のなかで抑圧された人々が、社会的・経済的に恵まれた人々よりも優れた知識人であるかもしれないというテーゼを特徴とし、その認識論的優位性は、抑圧された人々が経験しうる出来事や、利用可能な資源に基づいている<sup>10</sup>。スタンドポイント理論家にとってジェンダーの視点は、そのような資源を与えうるものであった。スタンドポイントという語の使用は政治哲学者ナンシー・ハートソックによるものだが、スタンドポイント研究そのものは、「女性の観点 women's perspective」という言葉を使用した社会学者ドロシー・スミス、

科学社会学者ヒラリー・ローズなど、異なる学問領域を持つフェミニスト研究者たちが別々に行った研究から始まっている<sup>11</sup>。

スタンドポイント理論が形成されはじめた当初、そのきっかけは哲学的学術研究から生まれた問いではなく、直接には1960年代から始まる第二波フェミニズムの活動と研究が影響していた<sup>12</sup>。第二波フェミニズムが社会運動だけでなく知識批判に向かっていた背景には、主婦としての地位が女性たちにとっての理想と自明視される社会通念への異議申し立てがある<sup>13</sup>。江原由美子の説明によれば<sup>14</sup>、ベティ・フリーダンが「名前のない問題」と名づけたように、よき妻・よき母であることが女性たちに喜びや満足をもたらすという「常識」は、女性たちが主婦の生活に抱く不満を「あるはずのない」逸脱した感情として否定していた。それは女性たち自身にも共有されていただけでなく、理学、精神分析、社会学などの「専門知識」においても同様で、もし女性たちが不満を抱いたとしても専門家たちによって否定されたため、そのような感情を持つことや表現すること自体が阻まれてきた。「専門知識」の一部が女性たちにとって「社会統制」として作用していることに気づいた女性たちの怒りは、フェミニズムを知識批判に向かわせたのち、学問批判運動として女性学の発展に通じていくことになる<sup>15</sup>。

フェミニズム運動からの知識批判は、ジェンダーを自明視する社会通念や想定を揺るがすことで、既存のあらゆる研究の限界と間違いを明らかにし、新たな学術探求の可能性を開いた。しかも、批判の対象となったものの多くは、社会的・政治的価値観からは「中立的」とされ、「最良の科学」とさえみなされているものだった<sup>16</sup>。他方、政治的コミットメントが入るほどに客観性が損なわれるとされてきた従来の認識論にとって、明らかに政治的な意図をもって行われる研究が、なぜ批判的で生産的な学術研究をもたらすのか——ジェンダーバイアスを持つとみなされる女性たち、しかも特にフェミニストなのか——という難問が生まれてきたのである<sup>17</sup>。

フェミニズム運動から生じたこの問いに応答する形で、スタンドポイント理論は、知識人のジェンダーが、その人が持つ認識だけでなく、知るときの資源や能力にどのように影響を与えうるかを検証しはじめた<sup>18</sup>。哲学者アリソン・ワイリーの説明によれば、1970年代から80年代にかけ展開されたスタンドポイント理論は、以下の問いに答えるための資源を探求したものとして最もよく理解される——物質的・社会的に根強く存在する制度的不平等が、認識論的に特別な視点をもたらすとしたら、それはどのような知識理論になるのか。また、ジェンダーをはじめとしたカテゴリーに基づき、理想とされてきた認識論的作用 epistemic agents のあり方に疑問を投げかけることには、どのような意義があるのだろうか<sup>19</sup>。

当時、社会構造および知の生産と、それにとまなう権力行使の関係性を問う理論はマルクス主義とフロイトに代表される精神分析論であったため、スタンドポイント理論においても議論の中心はマルクス主義フェミニズムもしくは対象関係論となっている。なかでも、代表的なスタンドポイント理論研究のひとつとされるハートソックの「フェミニスト・スタンドポイント——フェミニスト史的唯物論に特化する基盤構築」<sup>20</sup>は、マルクス主義フェミニズムと対象関係論の両者を用い、史的唯物論の視点からフェミニスト・スタンドポイントの立論を試みた<sup>21</sup>。

ハートソックはまず、マルクスによる労働者の階級批判を取り上げ、その批判の源は実践活動にあることに注目した。人間にとって、現実そのものが「感覚的な人間の活動・実践」から成り立っているというマルクスの前提は、労働者の立場とそれに基づく資本主義批判が物質的生活と緊密に結びついているという帰結をもたらす。また、生産物や生産様式に含まれる手段は、社会関係及び自然界との関係に関する人間の理解を携えているために、マルクスの労働に関する分析は、自然条件を前提としている上で人間が「自然」であると同時に「社会的」であることを明らかにし、自然／文化の二元論の克服に成功している<sup>22</sup>。

続いて、労働力の売り手と買い手という二者関係について、生産という領域で考えたとき、「何が本当に労働力の売買に関わっているのか」<sup>23</sup>という問い——つまり、剰余価値が生産され、資本家に収奪される過程と、労働者が構造的に不利益を被る仕組みは、被支配者層の視点によってのみ明らかにできる、というマルクスの洞察にハートソックは注目した<sup>24</sup>。実践的または身体化された活動は、プロレタリアートという立場に認識論的優位性をもたらす——なぜならば、相対的に無力な立場から階級社会を生きなければならない労働者は、構造的に有利な立場にある人びとにとって無視できる社会的現実を経験しているからだ<sup>25</sup>。

しかしながら支配者層は、物体の生産と同様に精神的な生産手段、つまり商品だけではなくイデオロギーの生産をも支配しており、現実の関係性を隠ぺいすることが可能である。また、被支配者もその言説に参加せざるをえないため、現実には表面的には見えにくく、したがって、被支配者層の現実を明らかにするスタンドポイントには、科学的な分析結果と分析の土台となる政治闘争の両方が必要となる<sup>26</sup>。言い換えれば、スタンドポイントという認識論的優位性はむしろ、政治的コミットメントなしに得ることはできないのである。

ハートソックの同論文は、これらマルクスによる階級分析をプロレタリアートと資本家の関係ではなく性別分業 sexual division of labor<sup>27</sup>に当てはめ、マルクスが分析の対象から切り捨てた女性の生活活動と構造に注目することで、フェミニスト・スタンドポイントの可能性を探った。性別分業という構造化された生産関係に基づき、女性は男性と大きく異なる生活実践を行い、たとえば専ら交換価

値の生産を市場で行う男性とは異なり、家庭内で使用価値を生みだしている。同時に、男性が無視できる社会的現実を経験しており、これは女性に「男根主義的なイデオロギーと制度に関して、まだ達成されていないはるか深い批判を可能にさせる」<sup>28</sup>。つまり、家父長制イデオロギーや支配の構造を理解する手段となる、認識論的優位性としてのフェミニスト・スタンドポイントをもたらすと彼女は主張する。またここで、「女性の female」でなく「フェミニスト feminist」スタンドポイントと呼ぶのは、それが政治的コミットメントに基づく分析によって「達成される」側面と、性質上、解放の可能性をもつ側面の二つを示すためである。

マルクス主義の理論からフェミニスト史的唯物論の理論基盤を設定したのち、ハートソックは「どの社会においても女性の仕事は男性の仕事と構造的に異なる」<sup>29</sup>という前提のもと、生産労働と再生産労働の両方を担う女性たちの性別分業を取り上げた。また、ここで重要なことは、マルクスの階級意識論が特定の労働者に適用されないのと同様、ジェンダー意識も個人の女性や男性に負わせるのではなく、あくまで制度化された社会的実践と性別分業によって現れる特定の認識論と存在論に注目する点である。「個人は、あくまで個人として、これらの制度に与えられた見通しの外に出るような形で活動を変えるかもしれないが、そのような動きは社会全体のレベルで起こって初めて重要な意味を持つことになる」<sup>30</sup>と前置きされていることを強調したい。

ハートソックによれば、物と人の両方を生産する責任を負っている女性たちの生活は、物体の生産だけを担う男性よりも、より多くの複雑な関係性や対人スキルを必要とする具体的な労働に従事している<sup>31</sup>。したがって、生活が感覚的活動からなるというマルクスの主張に基づけば、女性は資本主義の下で、より深い物質的世界観と男性よりも強化された階級意識を持つという帰結をもたらすのである。また、これら女性たちの活動は、交換価値ではなく使用価値に多くが割かれていることを明らかにした。

さらに、上記の構造をどのように女性たちが内面化し、ジェンダー化された心理的・社会的な状態が基礎作られるのかを説明するために、ハートソックは対象関係論を用いた。唯物論的な心理学を主張するナンシー・チョドロウとジェーン・フラックスによる精神分析の議論を取り上げ、育児をめぐって性別分業をもたらす自己体験の男女間差異を実証的仮説として扱うことを提唱する。

性別分業は女性に育児責任を課しているため、幼児期の女子は養育者の女性、つまり母親と完全に異なる存在ではない自分自身を経験し、その存在をのちに女性として知ることになる。女子が具体的な女性性を与えられている一方、男子は本質的に彼の自我を脅かす存在である女性養育者に依存しながら、自分とは異なる存在に男性性を明確にする立場に置かれる。また、社会化の過程においても、

女子は女性の育児によって主要な自己の定義に共感が組み込まれ、より複雑な女性の関係世界は強化される。女性性が女子にとって具体的なものであるのに対し、男子にとっての男性性は、時折具体的に存在する父親のほかには、抽象的で文化的なステレオタイプから学ばなければならない。ハートソックは、これら性別分業の条件下で、自然なものとしてジェンダー化された自己概念の形成を経験する構造になっていることを説明した。幼児期の異なる心理的経験は、性別分業による男性と女性の活動の違いによって強化・構造化され、認識論および存在論として複製される。翻ってそれは「物質的な生活活動」を定型化するものとなっている<sup>32</sup>。

このようにハートソックは、性別分業によって固定化された構造状態と心理的な自我形成の経験である、マルクス主義と対象関係論を通じて、女性として社会化された人々がどのように認識論的優位性をもつ批判的視点を獲得しているのかを説明し、それを「フェミニスト・スタンドポイント」と名付けることでフェミニスト史的唯物論のための基盤を準備した。ハートソックの言葉を借りれば、フェミニスト・スタンドポイントによって「男性至上主義に対する特別で特権的な視点の利用を可能にするだけでなく、家父長制の資本主義的構造を男根主義的な制度とイデオロギーへの強力な批判を基礎付けることができる」<sup>33</sup>のである。

最後に、この後に続くまとめとして、ハートソックによる認識論的装置としてのスタンドポイントが持つ五つの特徴を紹介したい<sup>34</sup>。

1) 物質的生活は、社会関係への理解を構造化するだけでなく、理解そのものを制限する。

2) 物質的生活が、二つの異なる集団（資本家と労働者、または男性と女性）にとって相反的に構成されているとすれば、それぞれの視野 vision がもう一方の反転を表すこととなり、したがって支配構造のなかで支配者が利用できる視野は、部分的 partial かつ逆の perverse ものとなる。

3) 支配的階級（あるいは支配的ジェンダー）による視野は、すべての人びとが参加せざるを得ない物質的関係を構造化するので、単なる虚偽として片付けることはできない。

4) したがって、被支配者集団が利用可能な視野は、意図的な努力なしには得ることはできない。すべての人が参加している社会関係の表面下に潜り込み、隠された関係性を明らかにする科学は、社会関係を変えるための政治活動と、そこからしか育たない理論の両者を必要とする。

5) 被支配者の理解という意識された視野としてのスタンドポイントの採用は、人間集団の現実の関係を非人間的 inhuman であるもの——生態と社会、自然と文化の二元論を否定し——として晒し、あらゆる人間関係や自然界に対する長期

間の変革を必要としながら、歴史的には解放の役割を果たす。

そして、性別分業の分析は、女性に対する抑圧の「本当の」構造を明らかにするとともに、女性たちがその構造に参加しながらも反対する分析の基礎を作ることができると結論づけ、女性の活動に基づいた社会全体の再定義と再構築へつながっていくと主張した<sup>35</sup>。「フェミニストは、女性の経験を再評価し、女性たちの多様な経験をつなぐ共通項を探し、その経験の構造的決定要因を探る作業を始めたに過ぎない」<sup>36</sup>。

しかし、ハートソック本人も留保するように、この議論は同時に女性たちの一元化を引き起こすために、レズビアンや有色女性を含む多様な女性の経験を不可視化してしまう危険性があり、スタンドポイント理論は本質主義的、人種差別主義的など、論争を巻き起こすこととなった<sup>37</sup>。

### Ⅲ. 「黒人女性のスタンドポイント」構築——パトリシア・ヒル・コリンズによる「内なるアウトサイダー」の議論から

冒頭でも紹介したように、黒人フェミニズム思想およびインターセクショナル리티の理論家として知られるパトリシア・ヒル・コリンズは、1986年「内なるアウトサイダーから学ぶ——黒人フェミニスト思想の社会学的重要性」<sup>38</sup>をはじめ、黒人女性の歴史的経験と現実を反映する「黒人女性のスタンドポイント Black women's standpoint」を打ち出し、一元的な不平等を基礎とする既存の研究を批判しながら、インターセクショナル交差的な抑圧の概念を導入した。

コリンズの議論に入る前に、当時の黒人フェミニズム研究が置かれていた状況と、彼女の研究が持った影響力について、エリザベス・ヒギンボサム<sup>39</sup>による考察を紹介したい。ヒギンボサムは、コリンズと同じく、知識社会学の伝統を持つブランダイス大学にて1970年代より学び、先立って博士号を取得した。当時の研究活動について「インターセクショナル的思考の初期の旅人だった」と想起するとともに、コリンズの研究は女性学への批判を可能にさせたとその意義を評価する<sup>40</sup>。

1970年代から80年代にかけて大学院を卒業したヒギンボサムを含む黒人フェミニスト研究者は、多くの困難を抱えていた。当時の大学では、黒人女性を対象とした研究やその他有色人種の研究について、社会的・理論的意義があるとはみなされておらず、逸脱したもの、もしくはせいぜい文化的に興味深い程度のものでされた。逸脱した集団とされる彼女たちは「自分自身、母親、姉妹、そして先祖の生活や状況を研究することの正当性について悩んで」<sup>41</sup> だけでなく、大学のなかで孤立し、ポスト獲得や昇進、学術出版にさいしても多くの障壁があっ

た。さらに、「象牙の塔 ivory tower」とも呼ばれるフェミニズム研究のなかで、黒人女性たちは白人フェミニズム理論研究を行うことや、またそれが黒人女性にも適用できるはずであるという「期待」を持たれていたために、白人中心的な考え方への挑戦は容易なことではなかった、という<sup>42</sup>。

このような軋轢のなかで、コリンズによる黒人女性のスタンドポイントの明確化は、本質主義や排他主義を打破しながら、誰しもが持つ社会的な位置——黒人女性の物質的現実という、生きた経験——が、特有の視点を生み出す、という議論を可能にした。コリンズの研究は、既存のフェミニズム研究を利用しながら「外部者の視点」を築き、それによって黒人女性研究者が「支配のマトリックス」に巻き込まれることなく、自分達自身の声へ発展させることができたと振り返っている<sup>43</sup>。

1986年に発表された、コリンズの研究活動初期の論文として知られる「内なるアウトサイダーから学ぶ——黒人フェミニスト思想の社会学的重要性」には、「黒人フェミニスト思想」の概念がいかに構想されてきたのかが論じられている。コリンズは、これらの議論がハートソックをはじめとしたスタンドポイント理論研究を踏まえていることを明示した上で<sup>44</sup>、「内なるアウトサイダー outsider within」としての黒人女性をもつスタンドポイントを主張した。アウトサイダーとしての黒人女性の位置を用いた考察は既存の社会学的パラダイムを変化させること、また研究者個人が自身のスタンドポイントを利用することの有効性を論じている。「内なるアウトサイダー」とは、たとえば黒人女性が家事労働者として、白人社会の最も親密な空間ともいえる「家族」の内部に出入りし、時には名譽の一員にさえなりながら、決してそこに属さないことへの知覚など、黒人男性もほとんど持たない視点で白人エリートを見てきた歴史的に特有な位置の名付けである<sup>45</sup>。

コリンズは、ゲオルク・ジンメル「よそ者 strangers」論や、その「よそ者」を「周辺的な知識人 marginal intellectuals」と呼んだカール・マンハイムなど、マルクス主義から派生した知識社会学の議論を引きつつ<sup>46</sup>、周縁化された人々による批判的姿勢が学術にもたらす創造的発展の可能性について触れ、黒人フェミニスト思想を下記のように位置付ける。

社会学者は、私が黒人フェミニスト思想と名付ける新たな学際的文献を真剣に検討することで、大きな利益を得る可能性がある。黒人フェミニスト研究者たちは、アウトサイダーとして、現代の社会的言説を豊かにすることが期待される周辺的な知識人のグループに属しているのかもしれない。このグループ——社会学に対し、アウ

トサイダーとしての立場 standpoint を共有する他のグループも同様——を分析の中心に置くことは、従来のアプローチでは見えなく  
なっている現実の側面を明らかにするだろう<sup>47</sup>。

コリンズが例とする社会学では、他の学問と同様、圧倒的に白人男性の集団が支配的「インサイダー」を占めてきたため、その世界観は当然彼らの関心を反映している<sup>48</sup>。対照的に、歴史的に学問の領域から長らく排除されてきた黒人女性知識人は、既存の学術が彼女たちの経験を十分に説明するものではない状況に直面し、批判的姿勢を持ちやすい。そして、彼女たちは、社会学の基礎的なパラダイムを理解し使用する内部者であると同時に、学術の主流にとっては外部者という「内なるアウトサイダー」として、伝統的に「正常」とされてきた前提や方法の歪みを指摘し、根本的な疑問を問いかける潜在的な認識論的優位性を持つのだ<sup>49</sup>。黒人フェミニズム理論家であるベル・フックスを引用しながら、コリンズは説明する——「私たちは、外から見た現実と、内側から見た現実の両方に目を向けた。そして、その両方を理解した」<sup>50</sup>。

黒人フェミニスト思想を「黒人女性のスタンドポイントを明確にし、黒人女性のために、また黒人女性によって生み出されるアイデアから構成されるもの」と定義し、その前提として以下を挙げる<sup>51</sup>。第一に、思想の構造やテーマとなる内容はその生産者である黒人女性の生活を形成する歴史的・物質的条件からの分離が不可能であること。次に、黒人女性が自分たちの経験について独自の立場や視点を持ち、その経験には、黒人女性が集団として持ちうる一定の共通認識があること。だが、共通認識を持ちながらも、例えば階級、地域、年齢など、個々の黒人女性の生活を形成している要素の多様性によって、その表出の仕方は異なっていること。最後に、黒人女性のスタンドポイントは存在するが、その輪郭は黒人女性自身にとっても明確ではない場合があること。したがって、黒人女性の多様な経験を模索し再表現 rearticulate することは、まだ彼女たち自身も認識していないかもしれない共通の視点を明確にする事実と理論を生み出すのである<sup>52</sup>。コリンズは、黒人フェミニズム思想の核となるテーマとして、1) 自己定義の重要性 2) 抑圧の絡み合う性質 3) 文化の重要性を上げ<sup>53</sup>、それらは抑圧に関する一元的分析の否定、つまり、のちにインターセクショナリティと名付けられるものにつながっていく。

アメリカ社会のなかで他者化され、疎外され続けてきた黒人女性たちにとって、自己定義や自己評価は生存に不可欠であり、黒人フェミニスト思想の歴史的・現代的な主張の一つである。コリンズが「統制のイメージ controlling images」として説明するように<sup>54</sup>、「黒人女性であること Black womanhood」は常に否定的

に定義され、攻撃され、経済的搾取を正当化してきた。したがって、黒人女性がそれらを拒否し、自分たちを再定義することは、否定的なステレオタイプの不正確さを指摘すると同時に、多面的な抑圧に抵抗し議論全体の再構成を促すものとなる。

たとえば、未婚で子どもを産み、勤労や育児責任を放棄しながら福祉に「依存」して生活する黒人女性シングルマザーのステレオタイプである「ウェルフェア・マザー」は、代表的な「統制のイメージ」の一つで、20世紀後半のアメリカで強固に流布し黒人女性の排除に利用されてきた。1960年代以降社会運動の勢いが増すなか有色女性シングルマザーの福祉受給者は増加したが、その後1980年代から90年代にかけこのような福祉政策は、黒人女性の「福祉依存」を強化推進しているという激しい世論の攻撃を受けた。政府は職業訓練や就労支援を主とした福祉改革を行い、当時のクリントン大統領によれば、シングルマザーは福祉ではなく「給料」の小切手を得るように推奨された<sup>55</sup>。しかし、ヴィクトリア朝的ジェンダー観に基づけば「母らしさ」とは、家にいながら子どものケアをすることであり、そもそもシングルマザー向け福祉が、母子家庭の子どもたちが母親の手で愛育されることを目的に設けられた歴史を振り返ると、就労促進とは矛盾する。ここから見えてくるのは、「母らしさ」をめぐる社会的な期待や要求は人種間で異なっており、白人女性にとって抑圧とみなされたそれは、そもそも黒人女性には適用されず、特定の誰かの利益に基づいているということである。このように、黒人女性の客体化に対して自己定義に基づいた異議を唱えることは、「母らしさ」の議論を根本から問い直すものとなる。

コリンズによれば、黒人女性を分析の中心とすることは、以下の理由で重要となる。「統制のイメージ」に見るように、黒人女性が他者として客体化されたイメージに直面するとき、自己定義と自己評価は非人間化に対抗するための重要な方法である。白人男性という「主体」は肯定的なイメージを持つのに対して、有色人種や女性は「他者」であり、否定的なイメージが付与されている。しかしその前提を否定することは、支配の根拠そのものの否定につながっていく<sup>56</sup>。また、「統制のイメージ」によって内面化される心理的抑圧の影響は大きく、彼女たちの自尊心は頻繁に攻撃されている<sup>57</sup>。攻撃から自分自身を守り、生き残るためには、外部的に与えられる定義を拒否し、自己定義や自己評価をもった内面的な強さがなければならない<sup>58</sup>。

黒人フェミニスト思想にとって二つ目の中心的なテーマである「絡みあう抑圧の性質 interlocking nature of oppression」は、現在インターセクショナルリティとしてみなされているものに最も近いかもしれない。人種、ジェンダー、階級による連動した抑圧は、長い間黒人フェミニスト思想に行き渡ってきたと同時に、

最も重要なイデオロギー的貢献である<sup>59</sup>。黒人女性は、一つの抑圧を軽減させたとしても、他の抑圧が存在し続けることを早々に認識していた。コリンズは、「有色男性が権利を得ることに大きな騒ぎが起こっているが、有色人種の女性はそうではない。有色人種男性が女性の主人になることが見え、それは以前よりも悪化した状況を招くだろう」という19世紀の奴隷解放活動家ソジャーナ・トルウスの言葉などを例に説明する。黒人女性が自分たちの従属性を明確に認識するのは、複数の支配構造の交差点 intersection での経験に依っている<sup>60</sup>。白人女性が白人性に、黒人男性が男性性に依拠することで求めた平等の根拠は、それらを持たない黒人女性には意味をなさないことは明らかだ。

独立組織された黒人女性運動は限られており、このフェミニズム運動における黒人女性の不在は、しばしば彼女たちのフェミニスト意識の欠如によるものとされてきた。しかし、先に見たように、黒人女性はむしろ早期に多元的抑圧を認識しており、黒人女性にフェミニスト意識が不足しているのではなく、男性中心の黒人運動や白人中心の女性運動が、黒人女性特有の問題には取り組まず、彼女たちの抵抗を排除し続けたためである<sup>61</sup>。20世紀半ばにかけて活動した黒人女性共産主義者のクラウディア・ジョーンズは、1949年「ニグロ女性問題の無視をやめよ！」と題した論考で、抵抗をめぐる運動からいかに黒人女性が排除されてきたかを訴える<sup>62</sup>。奴隷制下で黒人女性は労働に従事しながらも、特に母親としての地位を通じて家族やコミュニティ形成における中心的役割を果たしてきた。しかしジョーンズによれば、南北戦争後、奴隷身分から解放された黒人男性は、家族や教会など黒人コミュニティで男性権限を強化し、奴隷解放後も女性を奴隷として扱い続けた。また、白人女性と黒人女性の経済関係は男性至上主義を推進するものであるにも関わらず、白人女性は黒人女性を運動から排除してきた<sup>63</sup>。

絡みあう抑圧の性質の視点によって、人種、ジェンダー、階級に基づく一元的な抑圧の解明を目指す調査研究は、複数の制度の間のつながりに着目するものへと変化する。ここでコリンズは、スタンドポイント理論を含む、人種やジェンダーをマルクス主義に導入する試みについて批判する。これらは、一つの抑圧を主要なものとして優先させ、残りの抑圧をその主要とみなされるシステムの中の変数として扱うからである<sup>64</sup>。絡みあう抑圧の性質とは、例えば労働者、黒人、女性など、それぞれの抑圧の要素を足していく加法モデルではなく、それでは黒人女性に特有の経験や事象は見落とされてしまうのだ。むしろ、黒人フェミニスト思想が採用する包括的なアプローチは、人種と性別の相互作用を研究対象として扱い、「排除された多様性を挿入することで既存の理論を補強するのではなく、相互作用そのものに対し新たな理論的解釈を構築することを目指す」<sup>65</sup>のである。

さらにコリンズは、「どちらか一方の either/or の二元論的思考」についても、

ベル・フックスがそれを「西洋社会におけるすべての支配システムの中心的なイデオロギー的要素」と呼んだことを引用しながら批判する<sup>66</sup>。この二元論的思考の特徴は、互いの差異という観点——例えば黒／白、男／女、理性／感情、主体／客体など——によって人や物、考え方などを分類する点である。このような二項対立は、他方との差異を前提とした関係でのみ意味をなし、双方を補完しているだけでなく、必ず優劣を伴う意味づけがされている<sup>67</sup>。黒人女性が経験する抑圧の多くはさまざまな二元論の劣位に位置付けられたことによって形成されているため、黒人女性のスタンドポイントは二項対立的構造がどのように多元的に機能し、全体の支配システムを作り上げているのかを解明するものとなる<sup>68</sup>。

このような経験から、黒人フェミニスト思想は、ユニヴァーサルなヒューマニスト的世界観、つまりすべての人びとの解放を描く特徴を持っている。黒人女性が経験する抑圧の多元性や同時性は、あらゆる抑圧が黒人男性や他有色人種の人びと、女性など、他の集団に影響を与えていることを感知しやすく、したがって黒人女性だけの分離主義的政策を掲げることはほとんどない<sup>69</sup>。

最後に、黒人女性の文化の重要性を再定義し、説明しようとする努力は、黒人フェミニスト思想の三つ目のテーマである<sup>70</sup>。黒人女性たちの文化は、人種、ジェンダー、階級が抑圧を形成している状況を検討する上で、自己定義や自己評価をめぐるイデオロギー的枠組みを提供するのに重要な出典となりうる<sup>71</sup>。例えば、黒人女性たちが共有する対人関係においては、抑圧の共有によって生まれるシスターフッドが重要な文化の一部でありつづけてきた。奴隷制をはじめ過酷な環境に置かれた黒人女性たちは、お互いを頼り合うことで心理的・政治的な利益を得ただけでなく、さらには子育てや経済的にも助け合う独自の女性中心ネットワークの文化を創造し、黒人コミュニティ全体の抵抗を率いてきた<sup>72</sup>。また、芸術をはじめとした創造的表現に関する黒人フェミニズム研究は、それらが黒人女性の自己定義と自己評価の形成に不可欠であることを明らかにしている。外部的に客体化され続ける黒人女性にとって、小説、ダンス、音楽、演劇などは自己内部における創造性の自由を実現し、抵抗の基礎となる主体性を得る手段でありつづけてきた<sup>73</sup>。

このように、内なるアウトサイダーとしての黒人女性の視点と、そこから生まれる黒人フェミニスト思想は、社会学理論そのものにある大きな歪みや間違いに焦点を当てるものとなる。特に黒人女性知識人にとって、アウトサイダーとして経験された現実、社会学における事柄や理論を批判する有効な知識源として用いられ、対照的にインサイダーとしての社会的思考は、実際に経験された現実を見る方法を提供するものとなる<sup>74</sup>。さらに、これらを行う黒人フェミニスト研究者は、他のアウトサイダーとされる人びとにもその地位を利用することを促すことで、黒

人フェミニスト思想の特徴であるヒューマニスト・ビジョンに近づいていくのである<sup>75</sup>。

#### IV. 黒人フェミニスト認識論からインターセクショナルリティへ

これまで、コリンズがまさにスタンドポイントという言葉を用い、ハートソックに代表される白人女性たちのスタンドポイント理論を批判的に用いながら、どのように黒人フェミニスト思想の特徴を捉え、インターセクショナルリティの視座に到達したかを見てきた。最後に、ハートソックをはじめとする白人女性たちのスタンドポイント理論と、コリンズによる視点はどのように異なるのかの整理を通じて、認識論としてのインターセクショナルリティへの示唆を考察することで結論としたい。

第二節で見たように、ハートソックはマルクス主義の理論に基づき、性別分業は人間の理解を構造化し制限するので、全体を明らかにするためには被支配者の実践活動、つまり女性の具体的な経験に基づくスタンドポイントが必要であると主張した。コリンズは、とりわけ人種、ジェンダー、階級をめぐる、黒人女性が経験する物質的现实、つまり「生きた経験」に基づくスタンドポイント構築によって、さらに包括的な社会への分析が可能となることを論じている。どちらのスタンドポイント理論も、抑圧された集団としての女性たちが持つ経験や関心の共通性に注目し、支配者の視点からは隠された、あるいは価値があるとはみなされてこなかった知識と、それらに基づく視点が学術的な基本前提を揺るがす認識論的優位性を持つという見解において共通している。さらに、スタンドポイント理論は、特定の集団が権力関係によって位置付けられ、個人が経験する問題が、同じ属性をもつ集団にも共有されることを明らかにすると同時に、問題の対処に関する見解は集団内部の個人で類似したものとなり、したがって、政治的な行動を促す<sup>76</sup>という点も通じている。

しかしコリンズは、例えば1989年「黒人フェミニスト思想の社会構築」<sup>77</sup>のなかで、スタンドポイント概念についてハートソックを参照しながら黒人フェミニスト認識論を展開している。そこでは、「私は「黒人女性のスタンドポイント」という言葉を使うことで、「スタンドポイント」という包括的な言葉のなかの経験の複数性 plurality を強調して」おり、理論を構成する上で「スタンドポイント認識論を用いることは、この概念に問題がないことを意味しない」と言及する<sup>78</sup>。ハートソック自身が「女性の一元化を引き起こす」危険性を持つと留保した女性のスタンドポイントをめぐって、コリンズがむしろ「複数性を強調」しているというのは、どのような意味を持つのだろうか。

ここからは、「絡みあう抑圧の性質」が抑圧の要素を足すものではない、というコリンズの議論を再度取り上げたい。コリンズは、「絡み合う抑圧」モデル、つまり、インターセクショナリティ<sup>79</sup>が、加法モデルではないことを繰り返し強調している。黒人フェミニスト認識論において重要なことは、黒人女性の経験と思想を分析の中心に置くという点では、マルクス主義フェミニズムやアフリカ中心主義と類似した姿勢でありながらも、それを一つの理論伝統におかない点にある<sup>80</sup>。

黒人フェミニスト認識論は、集団としての黒人または女性がそれぞれ用いる認識論の要素を反映すると同時に、黒人女性に特有なものを含んでいる。黒人女性の抑圧をめぐるのは、ある側面では黒人男性に近く、ある側面では白人女性に似たものとなりうるし、またさらに別の側面では、どちらとも離れている<sup>81</sup>。「黒人女性の経験は、複数の認識論の間の接点を検討するための一つの社会的位置として機能する」とコリンズは説明する<sup>82</sup>。

さらに、黒人女性が他の集団よりも抑圧されているがゆえに「正確」で「よりよい」抑圧への見解を持っているという主張は、それは黒人フェミニスト認識論では否定される。マルクスやハートソックによるスタンドポイント理論が示唆するのは、従属化された集団ほど、抑圧について利用できる視野が純粹であることだが、これでは、ある抑圧に新たな層を追加することでより明確なスタンドポイントが生み出されるという二元論的思考を反映した加法モデルとなってしまう<sup>83</sup>。

ハートソックが性別分業に着目することで、マルクス主義の階級理論をさらに拡張させたことは、本稿第二節で確認した。しかし、ハンコックは、インターセクショナリティの視座に依拠すると、ハートソックの議論が持つ前提には二つの限界があるという<sup>84</sup>。一つは、マルクスの方法論を正確に再現しているために、中心と周辺という二元論——マルクスは階級、ハートソックの場合はジェンダー——に基づいている点である。もう一つは、ジェンダーをめぐる二元論が前提ゆえ、既に存在している中心に多様性を加えることとなり、二項対立の解消、根本的な再構成ができない点である。女性が共通の経験を持つというハートソックの議論は、「どちらか一方」の二元論的思考であるために、例えば黒人女性については、あくまで女性というカテゴリーなかにおける黒人という、下位集団に位置付けられることになる<sup>85</sup>。

ハンコックは、インターセクショナリティの視座が生み出した理論的転回は、中心の多様化であるという<sup>86</sup>。二元論的思考に基づく権力関係と権力関係が生み出す社会集団への考察は、インターセクショナリティに比較すると、単純なものとなる。インターセクショナリティは、スタンドポイント理論が持つ二元論的思考全体を問題視し、人種、階級、ジェンダーなどそれぞれの要素が相互に構築し

合う機能に注目する<sup>87</sup>。インターセクショナリティは、個人の多様な経験から集団の共通項を探し、中心を多く据えながら、より歪みのない全体の構造を明らかにすることを旨とする点で、新たな方法論となるものである。

最後に、これらの議論から見えるインターセクショナリティと個人の関係について言及したい。コリンズ自身は、この1989年の論文発表当初、「内なるアウトサイダー」という言葉について「様々な権力集団の間の周辺的な場所にいる個人」を表現するために使用したが、のちにこの用法がアイデンティティのカテゴリーへの還元という問題をはらむとして「不平等な権力を持つ集団が占める社会的位置や境界空間を表す」ために使用するようになったと説明している<sup>88</sup>。個人を作り上げるさまざまな社会的要素と抑圧について考えるとき、多くの場合は、先の二元論において劣位に置かれたなんらかの要素に当てはまるだろう。しかしコリンズは、そのように個人にインターセクショナリティを使用するとき、差異を気づかせる発見的装置としてはある程度有効かもしれないが、実際の不正な力関係をむしろ見えにくくしてしまう危険性に言及する<sup>89</sup>。ある要素を持つ集団は他の集団よりも、抑圧から利益を得ており、別の集団はそうではない。したがって、すべての集団に同等の結果がもたらされるかのように扱うことは、人種、階級、そしてジェンダーなどが階層的にどのように組織されるかという違いや、交差する権力システムが多様な人々に及ぼす影響の差を加味しないことになる<sup>90</sup>。コリンズが、加法モデルではないことへの主張は、経験する抑圧に差がないことを意味しない点には注意が必要である。

本稿では、スタンドポイント理論家として登場したコリンズが、マルクス主義や白人フェミニストたちのスタンドポイントを利用しながらも、それらの議論を超えて、いかに多元的な認識論的枠組みを作り上げてきたかを見てきた。コリンズによれば、「アウトサイダー」の位置におかれてきた人びとの実際の経験の集合であるスタンドポイントは、一元的分析枠組みを根本から問い直し、分析枠組みの中心そのものを転換する認識論としてのインターセクショナリティの視座を読みとることができる。

## 注

- 1 日本では、2021年には Bilge, Sirma and Collins, Patricia Hill. *Intersectionality, 2nd Edition*. (Cambridge: Polity Press, 2020(2013)) / スルマ・ビルゲ、パトリシア・ヒル・コリンズ著、下地ローレンス吉孝監訳、小原理乃訳、『インターセクショナリティ』（人文書院、2021年）の翻訳や、現代思想 2022年5月号第55号（青土社）にてインターセクショナリティ特集が組まれているほか、2022年現在、インターセクショナリティと題した講演やシンポジウムの開催が目立っている。
- 2 Crenshaw, Kimberlé W., “Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist

- Policies,” *University of Chicago Legal Forum*, no. 1(1989): 139-167.
- 3 Ted, “The urgency of intersectionality | Kimberlé Crenshaw,” December 8, 2016, video, 10:40, <https://www.youtube.com/watch?v=akOe5-UsQ2o>.
  - 4 Collins, Patricia Hill, *Black Feminist Thought* (New York and London: Routledge, 1991(1990).
  - 5 Bilge and Collins, *ibid.*
  - 6 Davis, Kathy, “Intersectionality as Buzzword: A Sociology of Science Perspective on What Makes a Feminist Theory Successful.” *Feminist Theory*; vol. 9, no.1(2008): 67–85.)
  - 7 *Ibid.*, 68.
  - 8 Bilge and Collins, *ibid.*, 1-2.
  - 9 Hancock, Ange=Marie. *Intersectionality: An Intellectual History* (New York: Oxford University Press, 2016)
  - 10 Alison, Wylie, “Feminist Philosophy of Science: Standpoint Matters” *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association*, Vol. 86, No. 2 (2012), 47-76.
  - 11 サンドラ・ハーディング『科学と社会的不平等：フェミニズム，ポストコロニアリズムからの科学批判』，北大路書房，2009年，130頁．
  - 12 Wylie, *ibid.*, 47.
  - 13 江原由美子「自己定義権と自己決定権——脱植民地化としてのフェミニズム」，山内靖ほか編『岩波講座 社会科学の方法〈8〉システムと生活世界』，岩波書店，1993年，162頁．
  - 14 同掲書，163頁．
  - 15 同掲書，163頁．
  - 16 Wylie, *ibid.*, 55.
  - 17 *Ibid.*, 47-48.
  - 18 *Ibid.*, 48.
  - 19 *Ibid.*, 48.
  - 20 Hartsock, Nancy, C.M, ‘The Feminist Standpoint: Developing the Ground for a Specifically Feminist Historical Materialism’ in In: Harding, Sandra, and Hintikka, Merril. B. eds. *Discovering Reality*. Synthese Library, vol 161. Springer, Dordrecht. [https://doi.org/10.1007/0-306-48017-4\\_15](https://doi.org/10.1007/0-306-48017-4_15).
  - 21 Hartsock(1983)に関する理解は、Wylie(2012)における説明を参考としている。
  - 22 Hartsock, *ibid.*, 283.
  - 23 *Ibid.*, 287.
  - 24 *Ibid.*, 287.
  - 25 Hartsock, *ibid.*, 285-288, Wylie, *ibid.*, 55.
  - 26 Hartsock, *ibid.*, 288.
  - 27 ここでハートソックが「性別分業」に gender division of labor ではなく sexual division of labor を使用する理由として、第一に、女性が子どもを産むことは社会的選択ではないが、子どもを育てることは明らかに社会的選択であること、第二に、人間の存在における身体的側面を保持することを挙げている。
  - 28 *Ibid.*, 289.
  - 29 *Ibid.*, 289.
  - 30 *Ibid.*, 289.
  - 31 *Ibid.*, 291.
  - 32 Hartsock, *ibid.*,294. Wylie, *ibid.*,56.
  - 33 Hartsock, *ibid.*, 284.
  - 34 *Ibid.*, 285.
  - 35 *Ibid.*, 304.
  - 36 *Ibid.*, 303.
  - 37 Harding, Sandra. “Standpoint Theories: Productively Controversial.” *Hypatia*, Vol. 24,

- No.4(2009): 192-200.
- 38 Collins, Patricia Hill, “Learning from the Outsider Within: The Sociological Significance of Black Feminist Thought.” *Social Problems*, Volume 33, Issue 6(1986) s14-s32.”
- 39 エリザベス・ヒギンボサム Elizabeth Higginbotham はデラウェア大学名誉教授（社会学）で、コリンズと同世代の黒人女性研究者として知られる。代表作は、*Too Much to Ask: Black Women in the Era of Integration* (University of North Carolina Press, 2001) など。
- 40 Higginbotham, Elizabeth. “Reflections on the Early Contributions of Patricia Hill Collins.” *Gender and Society*, Vol .26 No.1 (February 2012): 23-27.
- 41 Ibid., 23.
- 42 Ibid., 24.
- 43 Ibid., 25.
- 44 Collins, *ibid.*, 1986, s14 及び Collins, *ibid.*, 1989, 746 を参照。その後、コリンズが扱うスタンドポイント理論家はハートソックだけではないが、ここでは議論の性質上、初期の著作で注目していた、ハートソックを中心に対比する。
- 45 Ibid., s15.
- 46 コリンズは、黒人女性のアウトサイダーという位置と、それが生み出す可能性の意義を考える上で、ジンメルによる「よそ者」論が有効であるとし、利点として下記の三つを挙げる。(1) ジンメルの定義する「客観性」とは、「近さと遠さ、関心と無関心の独特な構成」である。(2) 人々は、互いに決して打ち明けられない方法で「よそ者」に打ち明ける傾向がある。(3) 「よそ者」には、状況に没頭する人々には見えにくいかもしれない様式を見る能力がある、など。Collins, 1989, *ibid.*, s15.
- 47 Ibid., s16. 強調は筆者による。
- 48 Ibid., s27.
- 49 Ibid., s28.
- 50 Ibid., s14. 引用元は、hooks, bell. *From Margin to Center*. (Boston: South End Press, 1984)
- 51 Collins, 1986, *ibid.*, s16.
- 52 さらに、コリンズによれば、黒人女性の経験についてそのスタンドポイントを明確にする事実と理論を生み出すことが黒人女性知識人の重要な役割の一つとなる。Ibid., s16.
- 53 本稿ではスタンドポイントの影響について着目するためにコリンズ 1986 年論文を取り上げたが、のちに発行された『黒人フェミニスト思想』ではさらに議論が発展し、黒人フェミニズムにおける際立った特徴として以下の六つが挙げられている。1) 黒人女性が集団として経験する抑圧への抵抗 2) 共通の課題に対する多様な対応 3) 類似集団としての経験と、それに続く集団知やスタンドポイントのつながり 4) 黒人女性知識人の貢献と対話的实践 5) 動的で移り変わるものとしての黒人フェミニズム思想 6) 黒人フェミニズム以外の社会正義を目指す運動との関係。Collins, 1991(1990), *ibid.*, 21-43.
- 54 「統制のイメージ」に関しては、Collins, 1991(1990), Chapter 4 “Mammies, Matriarchs, and Other Controlling Images” の章に詳しい。
- 55 1996 年クリントン政権下で実施された福祉改革は、シングルマザー支援を目的とした要扶養児童世帯援助 (Aid to Families with Dependent Children) の削減を中心としており、これらが黒人女性へ差別的なステレオタイプを前提として進められたことは、さまざまな研究が明らかにしている。Nadasen, Premilla, Jennifer Mittelstadt, and Marisa Chappell. *Welfare in the United States: A History with Documents, 1935-1996* (New York: Routledge, 2009) などを参照されたい。
- 56 Collins, 1986, *ibid.*, s18.
- 57 Ibid., s18.
- 58 Ibid., s18-19.
- 59 Ibid., s19.
- 60 Ibid., s19.

- 61 Ibid., s19.
- 62 Jones, Claudia. “An End to the Neglect the Problems of Negro Women!” in Guy-Sheftall Beverly. *Words of Fire : An Anthology of African-American Feminist Thought*. (New York: New Press, 1995(1949))108-123. クラウディア・ジョーンズ (1915-1964) は、トリニダード・トバゴ生まれの活動家・ジャーナリストであり、黒人女性の状況をマルクス主義に基づき分析した。アメリカで共産黨員として活動し投獄され、1955年にイギリスに追放された。
- 63 黒人女性が白人女性のフェミニズム運動から排除されてきた歴史については、Giddings, Paula. *When and Where I Enter: The Impact of Black Women on Race and Sex in America*. (New York: W. Morrow, 1984) / ポーラ・ギディングス『アメリカ黒人女性解放史』(1989年, 時事通信社)などを参照されたい。
- 64 Ibid., s19.
- 65 Collins, 1986, *ibid.*, s20.
- 66 Ibid., s20.
- 67 Ibid., s20.
- 68 Ibid., s20.
- 69 Ibid., s21.
- 70 Ibid., s23.
- 71 Ibid., s22.
- 72 黒人コミュニティにおける母親文化については、Collins, 1991(1990), Chapter 6 “Black Women and Motherhood”の章に詳しい。
- 73 コリンズは、黒人女性の文化に注目することの重要性を三点あげる。まず、抑圧された人びとが持つ抑圧に対する意識と、抑圧的な構造に対処するために行う活動は、既存の社会理論が示唆するよりも遥かに複雑であること。二つ目の理由は、集団的な社会運動や投票を通じた政治参加など伝統的なものだけに着目する「運動」の既存概念は、それらに参加できない黒人女性を排除している。三つ目は、黒人フェミニストの方法論に基づけば、黒人女性の文化そのものに、抑圧、意識、運動の関係を探求する分析モデルが含まれているため。
- 74 Collins, 1986, *ibid.*, s29.
- 75 Ibid., s29.
- 76 Collins, Patricia Hill. *Fighting Words: Black Women and the Search for Justice* (Minneapolis: Minnesota University Press, 1998), 201.
- 77 Collins, Patricia Hill. “The Social Construction of Black Feminist Thought.” *Signs*, Vol. 14 No.4(1989): 745-773.
- 78 Ibid., 747.
- 79 クレンショウのインターセクショナリティという語の使用以前にも、黒人女性が経験する人種とジェンダーの相関した抑圧を指す言葉は存在しており、「二重の危険 double jeopardy」や、コリンズの「絡み合った抑圧」「支配のマトリックス」などである。
- 80 Collins, 1989, *ibid.*, 757.
- 81 Collins, 1991(1990), *ibid.*, 207.
- 82 Collins, 1989, *ibid.*, 757.
- 83 Ibid., 757.
- 84 Hancock, *ibid.*, 85-87.
- 85 Collins, 1998, *ibid.*, 205.
- 86 Hancock, *ibid.*, 94.
- 87 Ibid., 757.
- 88 Collins, 1998, *ibid.*, 30.
- 89 Ibid., 208.
- 90 Ibid., 211.

Abstract

# Critics of Feminist Standpoint Theory from Black Feminist Thought: From Black Feminist Epistemology to Intersectionality by Patricia Hill Collins

Shioka HOSOJIMA

In recent years, attentions to “intersectionality” has been increasing in Japan. Intersectionality is considered an important research methodology that recognizes that the various social categories which define people – such as gender, race, class, etc. – interact with each other rather than a single category and form complex structures of inequality and oppression. It may also be well known that intersectionality is an intellectual product of Black women – spread of its recognition has been exponentially growing as soon as the term was coined by Kimberlé Crenshaw in 1989. However, as intersectionality became a “buzzword,” its definition has been the subject of confusion – whether it should be limited to theorizing identity, or whether it should be taken as a property of social structures etc.

With this background, the study of intersectionality as theory has developed since the 2010s, including the work of Patricia Hill Collins, the author of *Black Feminist Thought*. The research revealed that intersectionality is grounded in resistant knowledge and social movements, and one of which is the feminist standpoint theory formed in the 1970s and 1980s.

This paper explores epistemological connections between feminist standpoint theory and intersectionality through the concept of Black women’s standpoint, identified in the early works of Collins as meaning how people’s social location makes for a perspective that is related to material life practices and lived experiences. First, I will review the origins and overview of standpoint theory, particularly through Nancy Hartsock’s work. Second, I will examine how Black women’s standpoint has been conceptualized in Collins’s work and discuss its differences from the previous feminist scholarship. Finally, I will argue how Collins saw Hartsock’s theory critically but also how she used it to construct

the concept of Black women's standpoint. By doing so, I discuss intersectionality as epistemology that goes beyond binary assumptions of early standpoint theories and relies on the collectivity of individual experience while diversifying its center.